

2021 夏 伊吹山親子自然観察会 レポート

伊吹山ネイチャーネットワーク



【第1日=2021.7.31(土)】

天候：晴のち曇り 体感温度：20度～25度

【第2日=2021.8.2(月)】

天候：晴のち雨 体感温度：20度～24度

【観察会コース】伊吹山ドライブウェイ山頂駐車場(10:0集合)→西登山道→山頂(昼食=11:45～12:30)～山頂出発→中央登山道→山頂駐車場(14時頃・解散)

【参加者】

小学生：1年(1名)、2年(1名)、4年(4名)、5年(2名)、6年(2名)

中学生：2年(1名)、高校生：2年(1名) 計12名

保護者：10名

講師(会員)：山下吉和・中井宏行・木村達雄・竹村勝弘・竹村萬亀子・古井豊・柳瀬健造・富田収・藪田和則・立石和奏・小林エミ・小林勝 計12名

レポート：山下吉和 撮影：山下吉和、中井宏行、古井豊、富田収

=

今回のイベントは、梅雨明け10日間で最もよい時期での開催となりました。しかしながら、2日間とも不安定な天候となり、特に午後からは雷注意報が発令、空模様も怪しくなり、やむなくコースを東登山道から中央登山道に変更しました。また、コロナ感染・第5派が広がりを見せる中で、感染防止を徹底するとともに参加者の体調管理にも気をつけました。

スタート前レセプション

(1) 伊吹山についての説明

伊吹山は日本海の若狭湾と太平洋の伊勢湾を結ぶ風の通り道の壁になっている。

大陸から日本海を渡る湿った強い風が変化に富んだ独特の気候を生み出す。山頂の年間の平均気温は、約6度で、北海道の稚内の平均気温とほぼ同じといわれている。他の山岳と比較して、標高の割に風が強いことが特徴でもある。一日に風速10m以上の風の吹く日が年間300日ある。伊吹山のキリ(霧)は、琵琶湖、日本海、太平洋の湿気からつくられ、動植物を育てている。冬にたくさんの雪が降り、夏は霧で涼しく、強い風が吹く、高い山と同じ気候、このような環境条件が、山頂部と登山道だけで約300種もの植物の生育を可能としている。

(2) 今日の観察会のテーマについて

事務局から今日の観察会のテーマについて呼びかける。

「みつけよう！3つの生きもの」

① 「ルリトラノオ」(伊吹山にしかない固有種)

② 「ヒルゲンドルフマイマイ」

(伊吹山の環境を計るバロメーター)

③ 「イヌワシ」(国の天然記念物で絶滅危惧種、伊吹山にも生息)

「さがそう！2億6千万年前の古代生物の化石」(実物を提示)

(3) 子どもたちへのプレゼント

① 本会発行の植物図鑑「山頂お花畑・夏の花」

② 「夏休み自由研究の手引き」(本会作成)



<西登山道> ↓ アカソ（赤麻）



入り口のゲートをくぐると、いきなりアカソの大群落、子どもたちには、「この花は、大昔（縄文時代）からこの赤い茎の繊維が布を作るのに使われてきたんだよ。役に立つ花なんだけど、成長の勢いが強くて、他の花を脅かしているところがあり、アカソ刈りもしています。」と説明しました。

しばらく進むと、子どもたちの視線がクガイソウに集まりました。「ルリトラノオかな？」「葉を見てみようか、何枚ついている？」「そうだね、こんなふうに葉が3枚以上ついていることを輪

生と言います。クガイソウですね。」花を見るときは必ず葉も見ることを伝える。西登山道の前半は、クガイソウが多く、子どもたちも葉に注目するようになった。



しばらく進むんで行くと、ついにルリトラノオを発見！葉の付き方も2枚ずつ（対生）であることを確認して、「よかったね。伊吹山にしか咲いていない固有種、ルリトラノオに出逢えたね！」と、子どもたちと喜びを分かち合いました。

←左はクガイソウ（九階草・葉が輪生）
右がルリトラノオ（瑠璃虎の尾・葉が対生）

西登山道前半の登山道では、他にも、オトギリソウ、イワアカバナ、サラシナショウマ、クルマバナ、キオン、マルバダケブキ、ヒヨクソウ、キヌタソウ、コオニユリ、ヤマホタルブクロ、ダイコンソウ、スズムシソウ、オオヒナノウスツボ、イブキトラノオ、クサフジ、シモツケソウ、カワラナデシコなどの野草を見て歩きました。今回、昨年まで見られたトモエソウには出逢えませんでした。

また、樹木では、マユミ、マメグミ、オオイタヤメイゲツ、シモツケ、ヤマアジサイなどを観察しました。

シカの防護柵にも注目して、その内外の草花の違いも観察しました。「柵の外にも黄色の花が咲いている！」「よく気づいたね。キオンとマルバダケブキです。シカにも好き嫌いがあるって、食べない花はこんなふうに残っています。」



↑ キオン（黄苑）の群落

<伊吹山で出逢った主な花々>



イブキトラノオ

(伊吹虎の尾) ヤマホタルブクロ
(山蛍袋)



イワアカバナ
(岩赤花)



クサフジ
(草藤)



ヒメフウロ
(姫風露)



キリンソウ
(黄輪草)



カワラナデシコ
(河原撫子)



コオニユリ
(小鬼百合)



クルマバナ
(車花)



ウツボグサ
(靱草)



イブキフウロ
(伊吹風露)



スズムシソウ
(鈴虫草)



マメグミ
(豆茱萸)



オオヒナノウツボ
(大雛の臼壺)



メタカラコウ
(雌宝香)



ミヤマコアザミ
(深山小薊)



西登山道の間接のカーブでは、キリンソウとヒメフウロを、さらに進んだところで時期を過ぎたシモツケ、ヤマアジサイを確認しました。また、イブキフウロやイブキトラノオなどのように名前の頭にイブキがつくが、それは伊吹山で初めて発見されたことによるものであることも説明しました。

中間点を過ぎて10分ほど歩くと、シカの防護柵でしっかりと囲まれた「シモツケソウ園」に着きました。子どもたちは、シモツケソウはかつては山頂部に群生していたこと、伊吹山のシンボリックな花であることなどを伝え、なぜ、減少したのか、環境面（シカの食害、気候変動等）にも触れ、まずは、シカを追い出すために努力していることを伝えました。さらに、シカを入れなければ、ミヤマコアザミ（固有種）、メタカラコウ、イブキトラノオ、シュロソウ、シシウドなども花々もよく成長していることも付け加えました。



<伊吹山山頂にて>

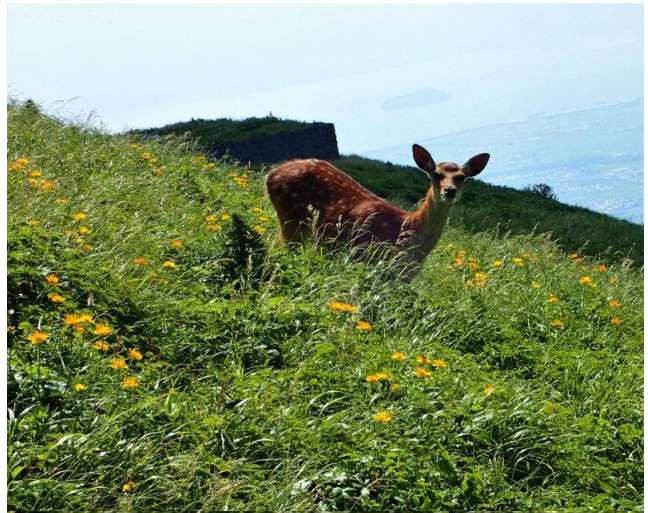
山頂周辺では、ウツボグサ、イブキフウロ、キンバイソウ群などを観察しました。

ハナヒリノキでは、毒草である故、昔の便所でウジ虫退治に利用したことを伝えるとまじまじとこの木を見つめていました。

また、イタドリの群生地では、「シカになって食べてみよう」とはたらきかけ、シカの食べた痕跡を見て、「こんなにいっぱい囓っている！」と驚きの声が聞こえてきました。

昼食後は、山頂トイレ付近の石灰岩でフズリナの化石を確認し、イブキジャコウソウ群では、「さあ、日本のタイムを嗅いで下さい」と手をかざしてニオイを体験しました。

また、「歩き疲れて元気がほしいときは、この葉を揉んでニオイを嗅いでください」と言ってオオヨモギを紹介しました。ニオイを嗅いだ子どもたちは、「ホント、いい香り！」と満足そう、あわせて、スカイテラスの売店で買った「モグサ」を百人一首をよんで説明しました。



↑ イブキジャコウソウ（伊吹麝香草） キンバイソウ（金梅草）とニホンジカ（下見時）

<中央登山道>

急な階段に気をつけながら下っていきました。途中で、サラシナショウマの大群落が開花に向けての準備を始めていました。

下山後は、駐車場山側の一角にあるモリアオガエルの池を観察しました。木の上での産卵はすでに終わっていましたが、池内で泳いでいる沢山のオタマジャクシを見ることができました。成長したモリアオガエルの写真を提示すると、子どもたちは興味深く見つめていました。

また、山側斜面に咲いている花の近くに行き、「今から薬草風呂体験をしてもらいます」と、葉を揉んでニオイを確かめてもらい、「これが薬草風呂の主成分になっているミヤマトウキですよ」と説明しました。



↑ モリアオガエルの池を観察

ミヤマトウキで薬草風呂体験→



今回の親子自然観察会を終えての感想は、「学んだことをすぐに吸収する子どもたち、その頭はやわらかく、感性はみずみずしい」ということです。本物の自然を、見て、聞いて、十分に感じてくれたことでしょう。

